

# KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

## John Updikeの現実受容の世界観 : Saul Bellow との比較において

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): John Updike, 世界観, Rabbit Redux, Varieties of Religious Experience キーワード (En): 作成者: 柏原, 和子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	<a href="https://doi.org/10.18956/00006171">https://doi.org/10.18956/00006171</a>

## John Updike の現実受容の世界観

—Saul Bellow との比較において—<sup>1)</sup>

柏原和子

### 要旨

Updike と Bellow の作品にはいくつかの共通のテーマが見られる一方、共通点を持つがゆえに両者の相違もまた明らかになり、その相違は作家の世界観に通ずる本質的なものである。Updike による書評から Bellow 評価とその共通点を割り出し、さらに *Rabbit Redux* と *Mr. Sammler's Planet* における現実との距離の取り方を比較し、両者の相違点を明らかにすることにより、Updike の世界観を考察する。いかに不完全で墮落していようとこの世の現実を受容するというのが彼の現実に対する態度であり、これは善悪含めすべてが神により創造されたものであるから、すべては神により是認されているとするルター派的世界観に由来するものである。このような世界観は 9.11 のテロ事件の直後に書かれた短編 “Varieties of Religious Experience” にも顕著に現れており、不完全な現実を受容し、その現実と折り合いをつけながら、生の真実を追究しようとする姿勢こそが Updike の創作姿勢なのである。

キーワード：John Updike、世界観、Rabbit Redux、Varieties of Religious Experience

### はじめに

2005年に Saul Bellow と Arthur Miller が、2年後には Norman Mailer が亡くなり、今年(2009年)初めにはとうとう John Updike までもが逝ってしまった。すさまじい速さで変化する20世紀後半のアメリカ社会を見つめ描いてきたこれらの作家たちのうち、都市の作家、アメリカ社会の中の知識人、「人間とは何か」を問い続ける主人公など共通の特徴を持つ Bellow と Updike はしばしば同列に論じられてきた。Updike 自身、いくつかの書評の中で Bellow を厳しく批判するとともに高く評価し、そのテーマにおいて自分との共通点を示唆してもいる。一方、共通点を持つがゆえに両者の相違もまた明らかになり、その相違は作家の世界観に通ずる本質的なものとなっている。本論では Updike による Bellow 作品の書評における批判と評価を出発点とし、両者の小説における主人公の現実との距離の取り方を中心に比較しながら Updike の世界観を考察する。

## 1. Updike の Bellow 評

Bellow の *Humboldt's Gift* が出版された1975年の *The New Yorker* 9月15日号に Updike による書評が掲載されている。“Draping Radiance with a Worn Veil”（「すりきれたヴェールを輝きにまとわせて」）というタイトルからもあまり好意的な内容ではないことが推測されるが、実際、Updike はこの作品をかなり痛烈に批判している。

The concepts of goofiness, of silliness, of “shenanigans” keep recurring. Human activity, often frenzied and feverish in Bellow’s Fiction, is more than ever felt as a distraction to thought, an obstacle to some truth. [. . .] The many brilliant episodes become too many—a static of human busyness that prevents Charlie from tuning in and that leads the reader to tune out. (*Hugging the Shore* 249)<sup>2)</sup>

ここで挙げられた、思考の妨げとなる興奮した行動や多すぎるエピソードに対する批判以外にも、豊かなシカゴの描写が途中でなくなってしまうことや、登場人物の数が操作できる範囲を超えているなどの欠点を挙げ、Bellowの文体はもっと刺激的で韻律的であった *The Adventures of Augie March* の頃よりも質が落ちた、とも言っている。そして数々の欠点を挙げた後、最大の欠点を次のように述べる。

The only real trouble with *Humboldt's Gift* is that the problems that engage the author do not engage the gears of his story. Death, power, America—Charlie Citrine has much to say about these cherished topics, but his remarks are incongruously juxtaposed and interwoven with the “capers,” the “daily monkeyshines,” that compose his mystic’s impression of natural human events. (250-51)

すなわち Updike は Bellow 自身に関心を抱く諸問題が物語の歯車とかみ合っていないと批判しているのである。Bellow の最高傑作と呼ぶ批評家もいる *Humboldt's Gift* でさえ、このように批判している Updike であるから、Bellow の作品の中でも比較的、評価の低い *The Dean's December* についてはさらに厳しい書評を書いている。“Toppling Towers Seen by a Whirling Soul”（目くるめく魂が見た、ぐらつく塔）というタイトルで *The New Yorker* に掲載された書評には「ナルシシズムが文学を台無しにしている、小説の中にノンフィクションの本があり消化力の不完全さのため事実でも虚構でもないものになっている、*The Adventures of Augie March* 以来、知的探究の感覚が Bellow の主人公を動かしてきたが *The Dean's December* での探究は矮小な限られたものになっている、そして最後には、アメリカ小説の傑作を書く力が Bellow にはあるが、それは堅固で簡素な核心から出てくるものであり、この小説にはそれがない」と痛烈な批判が見られる。(256-63)

しかし Updike は Bellow を全く評価していないのかというと、そうではなくかなり高く評

価していることが他のエッセイやインタビューの中から推察できる。James Gould Cozzens 作 *Morning Noon and Night* の書評の中で比較のために Bellow の *Herzog* に触れて、次のように述べ、Bellow の人物造形の才能と、より良い世界の存在、向上の追求や選択の自由の可能性への信念のすばらしさを賞賛している。

*Herzog*, for example, is an excellent novel. Its superiority to *Morning Noon and Night* lies not only in Bellow's far livelier gift for conjuring up personalities but in his, and *Herzog's*, belief that a better world somewhere exists, that improvement can be sought and choices can be made. (*Picked-Up Pieces* 407)

また1987年のインタビューでは今なお自分が刺激を受けるアメリカ作家として Roth, Cheever, Salinger, Malamud とともに Bellow の名を挙げて、Bellow 作品の最高のページを読むと “My God, nobody's ever written like this. Nobody's ever put those things on paper before.” と思うと述べている。(*Conversations* 202)

そして *A Theft* の書評では Bellow の35年にわたる作家生活を概観して次のように述べている。

It has been over thirty-five years since the publication of *The Adventures of Augie March* established him as our most exuberant and melodious postwar novelist, and as the most viable combination of redskin and paleface in our specialized, academized era. Street-smart and book-smart with an equal intensity, he has displayed . . . heroes grappling with, and being thrown by, the great ideas of Western man. (*Odd Jobs* 668)

先ほどの *Humboldt's Gift* の書評の中にも、Bellow にしか書けないパッセージが多々あること、Bellow はアメリカ小説における最上の肖像画家であるばかりでなく、自然詩人としてもすぐれていると評価した後、*Dangling Man* と比較しながら、“*Dangling Man*, though in snippets, merged earth and air, whereas *Humboldt's Gift* [ . . . ] dramatizes [ . . . ] the body / mind split that is its deepest theme.” (254)と、この作品が深いテーマを備えたものであることを指摘している。

さらに、厳しく批判した *The Dean's December* の書評でも Bellow の卓越ぶりを次のような言葉で述べている。

Bellow believes in the soul; this is one of his links with the ancients, with the great books. At the same time, like those great books, he feels and conveys the authentic heaviness in which our spirits are entangled; . . . . He is not just a very good writer, he is one of the rare writers who when we read them feel to be taking mimesis a layer or two deeper than it has gone before. His lavish, rippling notations of persons, furniture, habiliments, and vistas awaken us to what is truly there. Such a gift for the actual is not unnaturally bound

in with a yen toward the theoretical [. . .]. (263)

このように、物事を深く感じ取り、真にそこにあるものに対して目覚めさせてくれる Bellow を Updike は非常に高く評価している。*Humboldt's Gift* や *The Dean's December* への厳しい批評は、豊かな才能と深いテーマを持ちながら、それが作品として適切に機能していないことに対する Updike の苛立ちの現われであるとも考えられる。言い換えれば、Bellow は作家として「何を書くか」と「いかに書くか」の両方の点で卓越した才能を持ちながら、「いかに書くか」の点でこれら二つの作品は上手く行っていないと批判していると言える。Bellow の作家としての資質を高く評価するがゆえの厳しい批評であると言えよう。

「何を書くか」、すなわち Bellow の作品のテーマについて Updike は、上で引用したように、“heroes grappling with, and being thrown by, the great ideas of Western man” (西洋人の偉大な思想と格闘しては投げ倒される主人公)、“merge earth and air” (天と地の併合)、“the body / mind split” (肉体と精神の分裂)と表現している。これらはいずれも第二次世界大戦後のアメリカ社会の中で、物質的には豊かになったものの精神的には満たされず、社会と自分の生き方の相克に悩む人間が、現実の社会で幸福に暮らしながら永遠不変の真実や魂の救済に通じるような生き方を求め、物理的な時間の流れとは別に、過去から未来へと流れる永遠の時間の流れの中に自分が位置するとの意識を持っていることの現れである。これはまさに Updike 自身の数々の作品の中に流れる意識であり、宗教的に違いはあるもののこのような共通点を Updike は Bellow の中に見ていることが窺える。

## 2. *Rabbit Redux* と *Mr. Sammler's Planet*

テーマにおいて上のような共通点を持つ両作家であるが、現実社会のとらえ方には大きな違いが見られる。この相違をアメリカ社会が大きく変化した1960年代末、アポロ11号の月面着陸直後に書かれ、伝統的な価値観が崩壊したアメリカ社会を舞台にした両作家の作品、Updike の *Rabbit Redux* と Bellow の *Mr. Sammler's Planet* を例に考察していく。この2作品はともに現実社会での生き方と自身の理想とする生き方との相克に苦しむ主人公を擁する小説である。1960年代初頭にケネディ政権が打ち出したアポロ計画の一つの頂点が1969年7月のアポロ11号による月面着陸であった。人類が史上、初めて月の上を歩くというこの偉業はアメリカ国民のみならず世界中を熱狂させ、強い印象を与えた。この計画をヒントに、Bellow は *Mr. Sammler's Planet* を、そして Updike は *Rabbit Redux* を月のモチーフを使って書き、それぞれ1970年、1971年に出版している。いずれの作品も激動の60年代、今までの価値観が通用しなくなった時代のアメリカ社会を舞台にしている。*Mr. Sammler's Planet* の主人公 Mr. Artur Sammler はポーランドで育ったユダヤ人でホロコーストの生き残りである。1930

年代にはジャーナリストとして英国で過ごし、H. G. Wells をはじめとするイギリスの知識人たちとも親交があった。戦後、親類の Elya Gruner 医師がアメリカに呼び寄せてくれ、娘の Shula と共に、彼の世話になっている。Sammler にとって60年代のアメリカ社会は伝統的秩序が失われ、墮落腐敗した耐えがたいものとして認識されている。与えられた職務を責任を持って果たそうとしない人間たちの集まりであり、物質主義・金権主義がはびこり、道徳が崩壊したこの社会は狂気そのものだと彼は考えている。ある日、Sammler はバスの中でスリを目撃し警察に通報するが、警官は多忙を理由にまともに対応してくれない。自分は犯人を指摘できると主張したにもかかわらず、電話口で適当にあしらわれるのである。

Tensely sitting forward in bright lamplight, Artur Sammler like a motor cyclist who has been struck in the forehead by a pebble from the road, trivially stung, smiled with long lips. America! (he was speaking to himself). Advertised throughout the universe as the most desirable, most exemplary of all nations.

“Let me make sure I understand you, officer—mister detective. This man is going to rob more people, but you aren’t going to do anything about it. Is that right?”

It was right—confirmed by silence, though no ordinary silence. Mr. Sammler said, “Good-bye, sir.” (13)

またコロンビア大学のセミナーで1930年代のイギリスの状況についての講演を依頼されるが、講演の最中、若者に邪魔され罵詈雑言を浴びせられる。甥の Wallace は父親が死にかけているのに心配もせず、父が家に隠した財産のありかを探ることに熱心である。姪の Angela は父の財産に依存した気ままな生活を送っており、Sammler に会うと、自身の奔放な性生活をあけすけにしゃべる。娘の Shula は父親のためと称して、Govinda Lal 博士の講演原稿を盗む。Angela からアカブルコでのスワッピングの経験を聞いた Sammler はつぎのように考える。

The facts were too bad, too bald, abominable, pitiful. To a degree such behavior was based on theory, on generational ideology, part of a liberal education, and was therefore to an extent impersonal. (160)

姪の経験は単に彼女の個人的な経験にとどまらず、このようなことが受け入れられる方向に社会全体が変わってしまっていることを Sammler は感じている。自分が生きてきた時代とは価値観が変わってしまったこの社会に Sammler は溶け込むことはできないし、溶け込もうとは初めから考えてはいない。この現実を嘆きながら、ひたすら我慢して生きているのである。

Sammler は1920年代から30年代にかけて H. G. Wells と親交があり、それを覚えている娘の Shula は、父が Wells の回想記を書くべきであり、また実際、書いていると信じており、ひたむきに、かつ執拗に、その執筆を父親に奨励する。その「回想記」の役に立つものだと言って、彼女は V. Govinda Lal 博士の講義原稿を無断で借りて届けてくる。Sammler は不愉快

きわまると同時に喜劇的でもある娘の執念に、やりきれない思いを味わいながらもそのノートブックを開いてみるが、その冒頭の文に興味をそそられ読み始める。Lal 博士の論文『月の将来』は次のように始まっていた。

Then, bending open the notebook, he read, in sepia, in rust-gilt ink, *The Future of the Moon*. “How long,” went the first sentence, “will this earth remain the only home of Man?” (51)

これを読んだ Sammler は、たしかに今こそ、ここを立ち去る時機だと思い、論文を読み続ける。Lal 博士の研究は月を地球の植民地として利用する可能性を探るものであった。Sammler は “However, one could see the advantage of getting away from here, building plastic igloos in the vacuum, dwelling in quiet colonies, necessarily austere, drinking the fossil waters, considering basic questions only. No question of it.” (53) と考える。すなわち現代社会は脱出すべき場所であり、月は、そのために移住する場所という位置づけを与えられている。

墮落し、崩壊しかかっている社会に対し、Sammler はたった一人で戦おうとする。小説の終盤、死に瀕している Gruner 医師の許へ一刻も早く駆けつけたいのに数々の邪魔が入る。最大の邪魔となるのは黒人のスリと Fefer、そして Eisen との乱闘事件であった。スリの現場を写真に撮った Fefer はカメラを奪おうとするスリともみ合いになり、一方的に痛めつけられる。周囲には大勢の野次馬がいるにもかかわらず、誰一人、彼を助けようとはしない。老いて肉体力に欠ける Sammler は自分では助けられないので、仕方なく、Shula の別れた夫である Eisen に頼むが、Eisen はスリをあわや殺しかけてしまう。Sammler は自分の無力さを痛感する。

Sammler was powerless. To be so powerless was death. And suddenly he saw himself not so much standing as strangely leaning, as reclining, and peculiarly in profile, and as a *past* person. That was not himself. It was someone—and this struck him—poor in spirit. Someone between the human and not-human states, between content and emptiness, between full and void, meaning and not-meaning, between this world and no world. Flying, freed from gravitation, light with release and dread, doubting his destination, fearing there was nothing to receive him. (289-90)

やっこのことでたどり着いた病院で、今度は姪の Angela と娘の Shula を相手に一人奮闘することになる。挑発的なベビードールのような衣装で病院へ来ている Angela に、Sammler は「死にかけている父親に安らかな気持ちになれる最後の機会を与えてやれ」と言葉を尽くして説得するが、Angela は「父に赦しを求めるなんてばかげている、まっぴらだ」と突っぱねる。つづいて Shula が病院へ電話をかけてきて、「Gruner 医師が非合法の墮胎で稼いだ隠し金を見つけた」と言う。その金を自分のものにしようとする Shula を Sammler は諫め、弁護

士に渡すよう説得する。Gruner 医師に生活の面倒を見てもらっている Sammler は、彼の死後、援助がなくなると生活できなくなる恐れもあるが、彼はあくまでも筋を通そうとする。しかし娘に対するこの説得も無駄だと確信している。

結局、Sammler が無益な説得を続けていた間に Gruner 医師は亡くなっていたと分かる。作品の最後は祈りの言葉で終わっている。この中の Gruner 医師を追悼する言葉に、Sammler が考える人間の生き方が表されている。

“Remember, God, the soul of Elya Gruner, who, as willingly as possible and as well as he was able, and even to an intolerable point, and even in suffocation and even as death was coming was eager, even childishly perhaps (may I be forgiven for this), even with a certain servility, to do what was required of him. At his best this man was much kinder than at my very best I have ever been or could ever be. He was aware that he must meet, and he did meet—through all the confusion and degraded clowning of this life through which we are speeding—he did meet the terms of his contract. The terms which, in his inmost heart, each man knows. As I know mine. As all know. For that is the truth of it—that we all know, God, that we know, that we know, we know, we know.” (313)

これが Sammler の考える人間の真実の生き方であるが、実際には、現代社会は混乱し、墮落し、自己の義務の自覚もない人間があふれる場所であり、崩壊しかかった世界の中で、このような、いかなる場合にも自分に求められていることを成し遂げようと努力し、最善の自己を発揮し、自己の義務を自覚し、それを果たす生き方を貫くことはほとんど不可能である。真実の生き方を体現してきた Gruner 医師は亡くなり、一人で戦おうとする Sammler は老いて自身の無力感を痛感している。そんな Sammler にとって、Lal 博士の論文は地球を脱出し月へと向かう選択肢を示唆するものであったが、月への逃避行はそう簡単に、実現できるものではない。このように *Mr. Sammler's Planet* において、現代社会は道徳が崩壊し、既存の価値観が通用しなくなった、耐え難いほど墮落した社会であり、Sammler にとって、とても受け入れることのできないこの社会は、脱出も選択肢の一つとすべき場所として描かれている。

一方、1971年に出版された Updike の *Rabbit Redux* でも月のモチーフが使われているが、ここでは月は逃避先ではない。この小説はアポロ11号打ち上げの日から始まり、第1章の最後には宇宙飛行士たちが月面を歩く姿をテレビで見る場面が出てくる。この小説の第1章には60年代のあらゆる変化が呈示されており、アポロ11号の打ち上げは、高度に発達した科学技術文明を端的に表すものとして登場する。しかし科学技術が必ずしも人間に幸福をもたらすとは限らないことが、何もない月面の描写によって表される。前作 *Rabbit, Run* において Rabbit は「上へ向かう空間にこそ自分の本当の居場所がある」と感じており、*Rabbit, Run* には飛翔、高揚のイメージが多用されていた。<sup>3)</sup> 月への宇宙船打ち上げのモチーフは、この飛翔のイメー

ジを究極にまで推し進めたものと捉えることができる。しかし Rabbit が目指した上の空間にはクレーターと岩石しかないことが明らかになった。

主人公の Rabbit こと Harry Angstrom は36歳、Sammler と若い世代の娘、甥、姪たちとの中間に位置する世代である。新しいアメリカ社会との距離の取り方も両者の中間であり、Sammler ほど、拒絶反応はないが、完全に適応することもできない。第1章に登場する Rabbit は、社会の変化を認識しながらも古い価値観にしがみついた人物として現れる。36歳になった Rabbit は父親と同じ印刷所でライノタイプ工として真面目に働いている。10年前に考え、追っていた自己実現できる瞬間や、そのとき得られる高揚感のことはきれいに忘れ去り、ひたすらこの物質主義社会の一員として、社会の秩序に従って生きてきた Rabbit の姿が認められる。小さな一軒家を買ひ、妻子のために毎日コツコツ働き、仕事の中に小さな喜びを見出している。そしてその延長上にはアメリカという国家の幸福があるのだ。彼は民主党と Johnson 元大統領を支持しており、車には星条旗のステッカーを貼っている。妻 Janice の同僚 Charlie Stavros が、アメリカ政府を非難するのに腹を立てて、Rabbit はアメリカ政府を擁護する論陣を張る。それは論理的な Stavros の意見に対して、非常に感情的なものであるが、その根底には Rabbit の次のような信念がある。

But Rabbit is locked into his intuition that to describe any America's actions as a "power play" is to miss the point. America is beyond power, it acts as in a dream, as a face of God. Wherever America is, there is freedom, and wherever America is not, madness rules with chains, darkness strangles millions. Beneath her patient bombers, paradise is possible.

(47)

Rabbit にとって、アメリカは偉大な国であり、自由の楽園である。一方、Rabbit 自身、アメリカ社会の変化に気づいてもいる。世の中がどんどん悪くなってきており、正義の価値が曖昧になってきている。そして、その変化は理解できるが、その中で自分がどう生きていったらよいか分からないでいる Rabbit の姿が見られる。

妻 Janice の浮気と家出をきっかけに、Rabbit の生活に変化が生まれ、彼は10年間忘れていた自分の生き方の探索を再開する。今まで Rabbit が生きるために従ってきたルールは、アメリカ国家の法であり秩序だった。資本主義国家の一員として最善を尽くして働くことが、彼の守ってきたルールだった。しかしそれは、表面的なルールに過ぎなかった。表面のルールの背後にあるルールを探することは容易ではない。今まで体制に従っていさえすれば良かった Rabbit は、自分で物事を判断できない人間になってしまっていた。

生き方の拠り所となるルールを探すために Rabbit は二人の人物を家に入れる。ヒッピー娘の Jill と黒人活動家の Skeeter である。第2章と第3章ではこの二人が体現する60年代の新しい思想と Rabbit の関わりが描かれる。まずカウンター・カルチャーの体現者である Jill の

新鮮な考えの中に、自分の生きるルールを探そうと試みるが、結局、失敗に終わる。Rabbit は Jill の説く、精神や愛を中心に据える反物質主義的な生き方が、実は他の人々の物質主義的な生き方に依存しているという構造を見破ってしまう。

次に反体制運動活動家である黒人 Skeeter との関わりの中で Rabbit は黒人の側から見たアメリカ史を学習し、次第に黒人の心理を理解し、最初は恐れて嫌っていた Skeeter を賞賛するようになっていく。しかし結局、体制批判をしていた Skeeter の口から次のような体制側の意見と同じものを聞くことになる。

“[. . .] What is lib-er-alism? Bringin’ joy to the world, right? Puttin’ enough sugar on dog-eat-dog so it tastes good all over, right? Well now what is we all about if it ain’t keepin’ that coast open. Man, what is we all about if it ain’t keepin’ things open? [. . .] Nam is an act of love, right? Compared to Nam, beatin’ Japan was flat-out ugly. We was ugly fuckers then and now we is truly a civilized spot. [. . .] We is the spot. Few old fools like the late Ho may not know it, we is what the world is begging for. [. . .]” (263)

矛盾をはらんだ彼の思想も、Rabbit の役には立たないことを知る。

小説の最後まで来ても、Rabbit は変化したアメリカ社会で自分が生きるためのルールを見つけれないままである。しかし小説の初めに見られたような古い価値観にしがみついた Rabbit は姿を消し、アメリカ社会の多様性を認識し、一旦は全く違った価値観にも歩み寄ろうとする柔軟な Rabbit がそこには存在する。<sup>4)</sup>

このように Sammler と Rabbit の、現実社会との距離の取り方には明確な違いが見られる。現実社会を批判し、決して溶け込むことを考えない Sammler に対し、Rabbit は批判しながらも歩み寄り、最後は多様な価値観に満ちた、変化したアメリカ社会を受容する。人間の真の生き方を探るという共通テーマを持つ Updike と Bellow であるが、現実と距離を取ってその中で自己の居場所を見つけることを諦めている Bellow の主人公と、あくまで現実社会での居場所を探そうとする Updike の主人公には両作家の世界観の相違が反映されている。理想の生き方を追求し現実を厳しく批判する Bellow に対し、Updike はいかに墮落した社会であろうとも現実社会を受容し、その中で生き方をまず考えるのである。

### 3. 現実受容の姿勢とルター派的世界観

*Rabbit Redux* に見られる、社会を受容する姿勢はこれ以降の作品にも受け継がれ、*Rabbit Is Rich* では金持ちになり、自己探索を忘れて物質的欲望を満たすことに幸福感を味わう Rabbit が描かれ、*Rabbit at Rest* では迫り来る死の恐怖と老いからくる周囲との疎外感に悩みながらも、独立記念日のパレードでアンクル・サムを演じる Rabbit は「自分の時代は終わって、新

しいアメリカが出現している」ことを感じ、それを受け入れている。さらに9.11のテロ事件以降に発表された短編 “Varieties of Religious Experience” でも、あのような悲惨な事件があった後も、アメリカは生き続け、進歩し続けるすばらしい国だというメッセージを打ち出している。一見、能天気さえ見える、このような現実をありのまま受け入れるという姿勢は、Updike のルター派的世界観に由来するものである。

Darrel Jodock は “What Is Goodness?: The Influence of Updike’s Lutheran Roots” の中で、ルター派の伝統の特徴の一つに、「この世における神の存在と活動を強調し肯定する」ことを挙げている。「イエスにおいて神は人間と一体となった。したがって神は創造されたこの世界のいかなる面でもそこに共に存在し、常に作用する」のである (Jodock 123)。この神の宇宙遍在の観点からすると、この世を真に説明するのは気晴らしなどではなく意義深いことである。John Updike ができうる限り正確に生を描くという行為を「聖なる」行為だと呼ぶとき、現れるものはまさにこの顕現の原理である。そして Jodock は Updike がインタビューの中で語っている言葉を引用する。

Any act of description is, to some extent, an act of praise, so that even when the event is unpleasant or horrifying or spiritually stunning, the very attempt to describe it is, in some way, part of that Old Testament injunction to give praise. The Old Testament God repeatedly says he wants praise, and I translate that to mean that the world wants describing, the world wants to be observed and “hymned.” So there’s a kind of hymning undercurrent that I feel in my work. (Plath 253, qtd. in Jodock 133)

そして Jodock は、描写は、描写される世界に神が存在すると理解されたときにのみ、讚美になることを指摘し、Updike が神の存在を信じる作家であることを確認している (Jodock 133)。

実際、数多くのインタビューの中で Updike は、自分がルター派教会員の家庭で育ったこと、ルター派の持つ、「この世を受け入れる姿勢」を自分も持っていることを述べており、エッセイ集 *Self-Consciousness* の中で、自分の世界観について次のように述べている。

Down-dirty sex and the bloody mess of war and the desperate effort of faith all belonged to a dark necessary underside of reality that I felt should not be merely ignored, or risen above, or disdained. These shameful things were intrinsic to life, and though I myself was somewhat squeamish about sex and violence and religion, [. . .] they must be faced, it seemed to me, and even embraced. (*Self-Consciousness* 129)

また1985年のインタビューでは自分の立場について、ルター派として育ち、宗教を捨てないことを決意したと述べた後、次のように続ける。

But because of that, I came to the decision to write about the imperfect world—a world that is fallen. That’s why many people find my books so depressing. But for me it isn’t

depressing to say that the world is imperfect. Here the work begins: One confesses this imperfectness more or less happily and starts to think about what one is to do with the world in this condition. (Plath ed. 174)

このように、この世の不完全さこそが Updike に筆を取らせる原動力となっている。不完全で墮落してはいてもこの世をそのまま受け入れるという姿勢の裏には、この世界は不完全な部分も墮落した部分もすべて神によって創造されたものであり、それゆえ、すべてが神によって是認されているという Updike の世界観がある。われわれの存在は天から贈られたものであり、したがって、生きることはすばらしい至福である。われわれがどこで何をしようとも、神はすべてを知っており、われわれ人間は常に神の熟視の下にいる。神はあまねく遍在するのである。

#### 4. “Varieties of Religious Experience” に見られる Updike の世界観

9.11を題材にした短編 “Varieties of Religious Experience” にも Updike のこの世界観は明確に現れている。この短編は9.11のテロ事件を複数の視点から描いたもので全体が6つのセクションから成り立っている。最初の二つのセクションは、シンシナティーに住む監督派教会員の弁護士 Dan Kellogg が、この事件を経験する物語である。Dan は、たまたま遊びに来ていた娘一家が住むブルックリンの高層アパートの10階から孫娘と共にテロを目撃し、「神など存在しない」という啓示が彼を襲う。

The laws of matter had functioned, was the answer. The event was small beneath the calm dome of sky. No hand of God had intervened, because there was none. God had no hands, no eyes, no heart, no anything.

Thus was Dan, an Episcopalian lawyer of sixty-three, brought late to the realization that comes to children with the death of a pet, to women with the loss of a child, to millions caught in the implacable course of war or plague. His revelation of cosmic emptiness thrilled him, though his own extinction was held within this new truth like one of the white rectangles weightlessly rising and spinning within the boiling column of smoke. (“Varieties” 93)

「神の手は介入しなかった。なぜなら神などいないからだ。神は手も、目も、心も何も持ってはいなかったのだ。」と Dan は感じ「宇宙は無意味だという啓示が彼をぞっとさせた」のだった。この後、Dan は娘の Gretchen と一緒に、献血の登録をしたり、教会での追悼の礼拝に参加したりする。これほどの事件が起こったのに、ニューヨークの人々はパニックにならず粛々と自分にできることをし続けている。教会では Dan は、人間という動物に驚く。人は神によって犬のように蹴とばされたのに、神の手をなめるために這い戻ってくる。今まで慰めを感じて

いたアメリカ人の宗教性は今や Dan にとって野蛮なものに思える。彼は偉大な近代国家が国旗とロウソクという、擦り切れた古い魔法で癒そうとしている光景をグロテスクで情けないと思ひ、苛立ちを感じている。

第3セクションは、テロの実行犯となったムスリムの若者 Mohamed の視点から描かれている。Mohamed は4人の姉妹が売春婦になるのを防ぐために聖なる戦いに身を投じたのであった。アメリカに溶け込むように指示を受けている Mohamed は、不透性の殻をまとうようにして、地獄へ導く西洋文明から身を守っている。小さな綻びから計画全体が脅威にさらされそうにもなったが、神の手が伸びてきて守ってくれた。彼は航空学校の登録証と、偽造のパイロットのライセンス・カードを持っている。

第4セクションは、ワールド・トレード・センター・ビルで金融の仕事をしていてテロの犠牲になる Jim Finch の視点で語られる。妻から電話がかかってくる話している最中にテロが起こる。次第に状況が悪化していく中、夫として、また父親として責任を果たそうと、最後まで電話でメッセージを伝え続ける Jim の姿が感動的に描かれる。

第5セクションはペンタゴンを攻撃することになっていた第3の飛行機が舞台である。第3セクションに出てきた Mohamed と、彼の弟分である Nawaf がこの飛行機に乗った模様である。携帯電話で家族らと話し、何が起こったかを知った乗客たちは犯人の意図を阻止するべく、ハイジャック犯に襲いかかる。乗客の一人の老婦人 Caroline の視点から描かれる。

最後のセクションは再び、Dan Kellogg の視点に戻る。事件から6ヵ月後の3月、Dan は再び、マンハッタンの娘のアパートを訪れる。この6ヶ月の間にも、「神はいない」という Dan が得た啓示を確認するような事件が次々に起こった。戦争は無意味な犠牲者を出し続け、火事や洪水といった災害もある。世界は転げ落ち続け、死や苦痛を吐き出している。

しかしこのテロ事件は、孫娘 Victoria の成長ももたらしていた。事件以来、ニュースを見続けてきた5歳の Victoria は、様々なことを考えるようになっていた。Dan は彼女の表情に、大人の女性美や女性の神秘性の種のようなものを感じ取る。瓦礫が片付けられたビルの跡地には、毎晩、モニュメントのように2本の青い光線によるライトアップが行なわれているが、それを Victoria は祖父に、「あれはあそこにいる人たちが皆、天国へ行ったという意味だ」と説明する。

アパートのテラスから跡地を見ながら Dan は考える。“They were not there, but Dan was here, and God with him: the atheistic expunging had not occurred” (“Varieties” 104). Dan は無神論者にはならなかったのだ。教会にも通い続けていたが、その理由は次のように述べられる。

Why punish with his non-attendance, in protest of something God and not they had done, a flock of polite people for whom periodically chorusing the Apostles' Creed was part, and

no the very least part, of getting along, of doing their best, of being decent citizens?  
("Varieties" 104)

教会に行かないでいると、よき市民として最善を尽くして生きている仲間の信徒たちに申し訳ないという思いから、Dan は教会に行くのをやめなかった。神はあのような恐ろしい事件を起こさしめたが、人間はそれでも寄付を募ったり、お祈りをしたりして、自分たちの最善を尽くして生きている。10階のテラスから跡地をながめながら、Dan は次のように考えている。

While he stood there ten stories above the Brooklyn alley [. . .], the towers' distant absence seemed a light throwing a shadow behind him, a weak shadow, but inextricable from his presence—the price, it could be said, of his living presence. He was alive, and a shadowy God in him. ("Varieties" 104)

そしてテラスに出てきた Gretchen と Victoria を Dan は「彼の子孫、遺伝子的永続への入場券」と呼び、娘や孫を通じて自分が過去から未来へ連綿と続く、永遠の生命の連鎖に連なっていることを感じている。これこそが神が創造した世界なのであり、自分もその一部であることを Dan は感じているのである。

大勢の人の命が一瞬にして奪われてしまった憎むべきテロ事件、そしてそのような恐ろしい事件を起こさしめてしまったこの世界、これもまた神の創造物であり、私たちはこれを受け入れ、その中で自分の居場所を見つけて生きていかなければならない。そして自分が神の創造したこの世界の一部であることを感じる時、自己の存在意義を確信できる。これが Updike がこの作品に込めた強いメッセージである。

## 5. むすび

Bellow と同じく、現実社会と自己の生き方の相克に悩む主人公を描いてきた Updike であるが、60歳代後半にして一つの答えを見出したように思われる。Bellow の Mr. Sammler が回復不能なほど墮落したものと捉え、月へ逃げ出すことも考えた1960年代のアメリカ社会を、Updike の Rabbit は何とか受け入れようとした。それから30余年、9.11 のテロ事件にイメージネーションを刺激された Updike は "Varieties of Religious Experience" を書き、自らの世界観を端的に表した。いかにおぞましい悪意に満ちた事件が起ころうと、私たちはそれを無視せず向き合わなければならない。現実をありのまま受け入れるという姿勢は彼のルター派的世界観に由来するものであり、神の創造物であるこの世は、いかに不完全であろうと墮落しようとして神によって是認されていると Updike は考える。この世を受容し、その中で自分のなすべきことを果たす。作家である Updike にとってのなすべきこととはこの世を描くことなのである。また今、自分が生きているこの世界は過去から未来へと永遠に続く大きな時の流れの一

部であり、自分がこの世に生を受け、また子孫を残すことで生命の連鎖に連なり、永遠の一部になる。これを確信することにより、自己の存在意義をも確信できるのである。

このような世界観の下、不完全な現実を受容し、その現実と折り合いをつけながら生の真実を追究しようとする姿勢こそ、Updike の創作姿勢であり、Updike の小説を面白くしているのも、ただ日常生活を描くだけでなく、主人公が真摯に自分の生き方を追求する姿を描くことにある。

## 注

- 1) 本稿は2005年12月10日、関西学院大学で開催された日本アメリカ文学会関西支部第49回大会フォーラム「現代アメリカ小説とソール・ペローの死」においてハネリストとして発表した原稿に大幅に加筆修正を施したものである。
- 2) 引用テキストにはこの書評が再録されたエッセイ集 *Hugging the Shore* を用いた。次の *The Dean's December* の書評も同エッセイ集からの引用である。
- 3) *Rabbit, Run* における飛翔のイメージについては次の論文に詳述されている。青山義孝、「アップダイクと飛翔のイメージ」『甲南大学紀要・文学編』49号、1983年、154-72。
- 4) *Rabbit* の自己探索については拙論「冷戦下の『アメリカ』における自己探索」において詳述している。

## 引用文献

- Bellow, Saul. *Mr. Sammler's Planet*. Harmondsworth: Penguin, 1977.
- Jodock, Darrell. "What Is Goodness?: The Influence of Updike's Lutheran Roots." *John Updike and Religion: The Sense of the Sacred and the Motions of Grace*. Ed. James Yerkes. Grand Rapids, MI: W. B. Eerdmans, 1999: 119-144.
- Plath, James, ed. *Conversations with John Updike*. Jackson, MS: UP of Mississippi, 1994.
- Updike, John. *Hugging the Shore*. New York: Knopf, 1983.
- . *Odd Jobs*. New York: Knopf, 1991.
- . *Rabbit Redux*. New York: Knopf, 1971.
- . *Self-Consciousness: Memoirs*. Harmondsworth: Penguin, 1990.
- . "Varieties of Religious Experience." *The Atlantic Monthly* Nov. 2002: 93-104.
- 青山義孝「アップダイクと飛翔のイメージ」『甲南大学紀要・文学編』49号、1983年、154-72。
- 柏原和子「冷戦下の『アメリカ』における自己探索」山下昇編『冷戦とアメリカ文学——21世紀からの再検証』第8章。世界思想社、2001年。

(かしはら・かずこ 外国語学部准教授)